

「歓喜に寄す」の原詩について

シラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759-1805)による「歓喜に寄す (An die Freude)」の初版が発表されたのは 1785 年ですが、その後の再版で部分的に改訂が行われています。例えばもともとのタイトルは、「自由」に寄す (An die Freiheit)」であったといわれています (当団の名前の由来はここにありますが)。ベートーヴェンは第九の作曲に当たって、この改訂版を元にしていました。したがって第九の歌詞の中にも初版と異なる部分があります。例えば「歓びの歌」の部分は次のようでありました (下線部が初版と異なる部分)。

[歌 詞] Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken, Himmlische, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder, was die Mode streng geteilt,
Alle Menschen werden Brüder wo dein sanfter Flügel weilt.

[日本語訳] 歓喜よ、美しい神々の火花よ、天上の楽園の娘よ
われらは炎のように酔いしれ、崇高なあなたの聖なところに足を踏み入れる
あなたの魔力は時の流れが厳しく切り離したものを、再び結び合わせ、
↳ (初版) 剣が
あなたのおだやかな翼のもとに全ての人々は兄弟になる
↳ (初版) 乞食も領主の

ベートーヴェンは「歓喜に寄す」のすべてを用いているわけではありません (ちなみに前ページに記したバリトンソロ「おお、友よ。～」の部分はシラーの原詩にはない、ベートーヴェンのオリジナルです)。原詩はベートーヴェンが作曲した部分の倍以上の内容があり、全部で9節あります。第九の歌詞は実にその前半の一部に過ぎないのです。「歓喜に寄す」の全文の大意は以下のとおりです。

地上で心を一つにすることにより星を通り神のもとに行けよう
歓喜は無限の宇宙の歯車を回す
真と善と信仰の向うに歓喜を見出す者は、死してのち天使を見よう
耐え忍びし者には、神が報いてくれよう
憎むな！！全てを許せ、神のように大らかであれ
天は神が治め、地上は和解の場ぞ
弱き者よ、ブドウ酒を飲んで強くなれ
宇宙を、そして空の彼方のものをたたえよう
勇氣ある者、弱者を助ける真実の人をたたえよう
(ブドウ酒の)杯を挙げて誓おう、大いなる者への忠誠を！！

ベートーヴェン作曲 交響曲第九番「合唱つき」解説

(2004年のフライハイ合唱団の演奏会における解説より)

第九といえば[譜例1]のメロディが有名ですが(以下「歓びの歌」とします)、このメロディが出てくるのは4つある楽章のうちの最後の楽章であり、ベートーヴェンはなかなかこのメロディを登場させません。

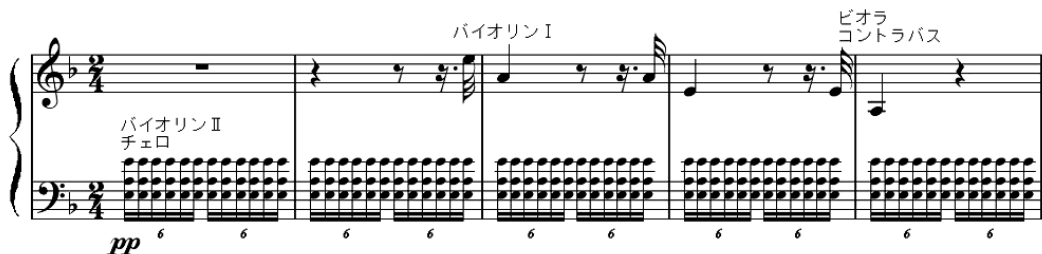


そしてこのメロディが登場したときに、効果的に登場するように、ある仕掛けを施しています。それを理解するには、第1～第3楽章のテーマとなるフレーズを理解しておく必要があります。そこで、各楽章を順を追って見ていきましょう(楽章のカッコ内は今年の演奏会における演奏時間)。

第1楽章(16分20秒)

力強い前奏に引き続き、セカンドバイオリン、チェロの細かな刻みとホルンのロングトーンに乗ってファーストバイオリン、ビオラ、コントラバスが引っかくような鋭いリズムを刻みます[譜例2]

[譜例2]



第2楽章(11分40秒)

セカンドバイオリンに弾むようなリズムが現れ[譜例3]、他の弦楽器、木管楽器などに受け継がれていきます。4つの楽章の中で時間的に最も長いのは第4楽章であり、小節数にすると940小節あります。一方第2楽章は繰り返しを含めて第4楽章を上回る954小節もあるにもかかわらず、演奏時間は4つの楽章で最も短いのです。つまり、それだけ内容が凝縮されているわけです。

[譜例3]



第3楽章(15分10秒)

これまでの楽章と異なり、祈るような調べがバイオリンによって演奏されます[譜例4]。ベートーヴェンはこの楽章を最初に書き上げています。

(2005年フライハイท์合唱団演奏会における解説より)

第九の第4楽章の歌詞はドイツの詩人シラーが著した「歓喜に奇す」に基づいていますが、ベートーヴェンはその一部に追加や編集を行っています。第4楽章でシラーの詩に入る前に、バリトンソロに次のような書き足しを行っています。

“O Freunde, nicht diese Töne! sondern laßt uns angenehmere anstimmen, und freudenvollere.”

**(おお友よ、このような調べではなく、もっと心地よく、歓びに満ちたものを
歌い始めようではないか)**

ここで注目すべきは「歌い始める」ということで、この壮大な交響曲に歌を導入することを宣言しているわけであり、ここから交響曲に声楽が効果的に取り入れられることとなります。

ベートーヴェンの宗教観というのはよくわかっていませんが、数少ない記録の中に「神は宇宙を作って動かしている荘厳な光であって、人間の英知や理性の根源にあり、広大な英知である」と述べており、その世界観が次のテノールソロに表現されています。

“Froh, wie seine Sonnen fliegen, Durch des Himmels prächt'gen Plan,”

(太陽が天の広大な平原を駆け抜けるように喜ばしく)

ここで“Sonnnen”は複数形であり、無理に日本語訳すれば「太陽たち」となります。われわれのいる太陽系のような恒星系が無数に存在する、全宇宙を観念的に表しているといえます。

有名な歓喜のテーマなど、この曲の主題というべき箇所では、次のような歌詞が歌われます。

*“Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium, Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum!”*

**(歓喜よ、美しい神々の輝きよ、天上の楽園の乙女よ、われらは情熱にあふれ、
崇高なあなたの聖なところに足を踏み入れる)**

“Seid umschlungen, Millionen! Diesen Kuß der ganzen Welt!”

(抱きあえ、諸人よ！このくちづけを全ての世界に！)

ここでは人間の真の喜びと、「抱きあえ諸人よ」に表される博愛主義が見て取れます。クライマックスにあたる二重フーガではこの2つの歌詞が折り重なるように繰り返して歌われます。

最後のクライマックスでは、トロンボーンがあたかも天国の門をドンドンとたたくように次のようなフレーズを演奏します。



3楽章はゆっくりとした序章から始まりますが、バイオリンのメロディーは4度の進行が中心となっています。

(譜例 5) *バイオリン I*

p 4度 4度

4楽章の冒頭(ワーグナーは恐怖のファンファーレと表現しています)は、喧騒の中に4度あるいは5度音程が隠されています。

(譜例 6)

ff 4度 5度 4度

その後のレチタティーヴォと呼ばれるチェロとコントラバスの旋律には冒頭に5度が含まれます(譜例 7)。これに対して次の旋律(譜例 8)では4度が含まれる形となります。

(譜例 7) *チェロ*
コントラバス

f 5度

(譜例 8) *チェロ*
コントラバス

f 4度

おなじみの旋律(譜例 9)では、旋律の裏でチェロが5度音程で始まる副旋律を奏でます。

(譜例 9) *ヴァイオリン*

p 5度

4 楽章の最後では譜例 10 のように 5 度で締めくくっています。

(譜 例

木管群

5 度

The image shows a musical score for woodwinds. It begins with a treble clef, a key signature of one sharp (F#), and a common time signature. The music starts with a forte (ff) dynamic. The melody consists of a series of eighth notes, with the first five notes grouped as triplets. A slur covers the entire melodic line. The piece concludes with a final interval of a fifth, indicated by a bracket labeled '5 度'.

これまでみてきたように、この曲は 5 度で始まって 5 度で終わっているのです。ここに紹介したのはほんの一例で、これらの主一属関係は全曲を通して、隠し味として随所に見られます。このように研ぎ澄まされ、かつ、計算されつくした手法で書かれているために、この曲は 200 年経った現代においても聴衆の心をひきつけ、今後もまた演奏され続けることとなるのです。